文化と芸術
文化・芸術研究センター
ニュースレター
Vol.25
March 2017

CONTENTS

活動報告 SUAC Report
7年目を迎えたユニバーサルデザイン絵本コンクール
林左和子／文化政策学科 2
ボローニャのフラテルナル劇団によるコンメディア・デッラルテ公演
高田和文／理事・副学長 3
「子どもの足跡」プロジェクト 武田好／国際文化学科 4
ホスピタルアートプロジェクト 高島知佐子／芸術文化学科 5
「浜松・中山間地域づくり学生インターン」の取り組みと成果
舩戸修一／文化政策学科 6
公開講座報告
「国際文化都市としてのパリ」として 石川清子／国際文化学科 7
開催報告 文化芸術セミナーを開催 8

静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
静岡県浜松市中区中央2丁目1-1 〒430-8533
●Tel:053-457-6105 ●Fax:053-457-6123 ●http://www.suac.ac.jp/

Art & Culture

副学長 文化・芸術研究センター長
池上重弘
Shigehiro Ikegami

大学名所化プロジェクト、発進！

開学20周年記念事業の一環として、キャンパス内の施設、庭園等の用途再定義と、それに伴うリノベーション計画を県に提案したい。議会や県庁の関係部局、地元財界や諸団体に働きかけて「大学名所化」を実現したい―。これは2016年9月15日の大学運営会議で根本敏行副学長（当時）から提案された「大学名所化」の企画概要である。

大学名所化とは、2016年4月に着任された横山俊夫学長の構想によるもので、静岡文化芸術大学を地域の人たちのみならず広く海外からも人がやってくるような名所にしようというビジョンだ。2000年開学の本学は2020年に開学20周年を迎えるが、東京オリンピック・パラリンピックでたくさんの旅行者が訪日する2020年を目処に、本学のリノベーションを図ろうという企画である。

さて、リフォームとリノベーションはどう違うのか。いくつかのサイトで調べてみると、ほぼ以下のような違いが記されている。リフォームは、老朽化した建物を建築当初の性能・機能に戻すことを言う。それに対して、リノベーションは、既存の建物に大規模な改修を加えた上で、用途や機能を変更して性能を向上させ新たな付加価値を加えることを言うようだ。つまり、雨漏りのする天井を直すとか、ヒビの入った外壁を塗り直すとかいうだけでなく、本学の施設に新たな機能を加え、そのことにより多様な人々が集まる場にしようというのが、大学名所化プロジェクトが狙うリノベーションである。

先の企画メモにはさらに、以下のような文章が続く。―「大学名所化」には、図書館資料の活用をはじめ、数多くの方法が考えられるが、共同生活空間の学内確保を大きな柱のひとつとしたい。学内から要望のあった保育所や、留学生・日本人学生・定住外国人学生等の学生をはじめ、遠距離通勤者や地元会員企業関係者、国内外からのゲストも滞在できる宿泊施設、そして交流施設としての共同生活空間を学内に確保したい。

なんとも壮大な構想で実現は難しいと感じる方も少なくないだろう。もちろん企画書を書いただけで実現する類いのことでないのは十分承知している。それでも、実現に向けてまずは一歩ずつ歩みを進めようということで、根本副学長がリーダーシップを取り、文化·芸術研究センター長の私が実働部隊長となる形で、副学長の諮問機関として学内フィールドワークチーム、通称「学内探検隊」を立ち上げ、本学の施設を探検して用途見直しの可能性を探ることになった。

しかし大学運営会議の１週間後の9月22日に根本副学長が急逝された。根本隊長を失った悲しみも癒えぬ状態ではあったが、学内探検隊は2016年末までに報告書をまとめるというスケジュールになっていたので、学内探検隊の隊長を私が引き継いだ。10月12日にキックオフ・ランチミーティングを行い、その後の探検スケジュールを決めた。探検隊のメンバーは教員が４名（各学部２名ずつ）、職員が４名（うち１名は本学OG）、卒業生１名、学生２名、隊長の私、そして名誉隊長の横山学長、総勢13名である。

10月27日と11月22日の２回の探検では、学内施設をめぐりながら、思いついたことをポストイットに書き込み、自由創造工房に戻ったところで各自のポストイットを図面に貼り付けて意見交換を行った。荒唐無稽な思いつきも多々あったが、探検隊は「採算度外視、実現可能性は考慮しなくて結構」のルールで、自由に発想することに重点を置いた。

12月13日の第３回探検では学外に足を伸ばし、「ゆりの木通り」を地元商店街の方に案内してもらって歩いた。近くの商店街をキャンパスの外延として活用するという発想も得て、短くも濃密で意義深い探検となった。

12月末には財務室の佐々木さんの多大なご尽力で「大学名所化プロジェクト　学内探検隊報告書」が完成し、１月の大学運営会議で要点を報告、見取図に書き込んだアイディアの数々も回覧資料として提示した。

学内探検隊はさんざん大風呂敷を広げたわけだが、今度はその内容を精査し、具体的かつ現実的な案として大学名所化の方向性を定めなければならない。そこで、当初の予定通り、2017年1月19日の大学運営会議で横山学長が大学名所化プロジェクト・タスクフォースを提案し、承認された。タスクフォースは、学内探検隊のメンバーをほぼ引き継ぎながら、各学部から１名ずつ、探検隊に加わっていなかった教員も参加し、探検隊のアイディアを客観的に吟味できるようにした。

２月から３月にかけてタスクフォースの会合が集中的に行われた。そこでは、本学キャンパス内諸施設（未利用空間を含む）の用途を、全体としてひとつの国際名所となるよう再定義し、改修もしくは増設する案を作成することが求められた。「名所化とは何か」という根幹的な検討も含め、集中的な議論が展開した。2017年度に入ると「大学名所化プロジェクト」は、将来構想検討委員会という本学の公的な議論の場に引き継がれる予定である。

活動報告　SUAC　Report

7年目をむかえたユニバーサルデザイン絵本コンクール

林　左和子（文化政策学科）

ユニバーサルデザイン（UD）絵本とは、身体的、知的特性、年齢、そして文化などを超えて皆が一緒に楽しむことのできる絵本、UDの考え方を取り入れた絵本のことである。UD絵本コンクールは2010年にスタートし、今回で7回目となる。

今回のコンクールでは、特筆すべきことがいくつかある。

まず、5年ぶりに大賞受賞作がうまれたことである。

本コンクールでは大賞の要件を、UDの考え方、工夫が盛り込まれていることおよび絵本としても高い水準にあることと考えている。この基準は厳しすぎると思われる人もいるかもしれない。基準はともかく、何年も大賞を出さないことに疑問を呈されたこともある。しかし大賞作品はコンクールの理想を形として示すものとなる以上、妥協してはならないという思いが審査委員会にあった。今回の受賞作は、展開・絵ともシンプルであること、絵本としての完成度が高いことが評価された。シンプルであることの重要性について、表彰式で審査委員長が「「引き算の考え」で作られる絵本がある。余分なものを取り去り、本当に伝えたいことのみを残す方法である。必要なものだけを浮かび上がらせることで、誰もが楽しめるものとなる。本作は、引き算に成功している」と述べている。

UD研究賞は、UDの考え方、工夫が盛り込まれていること、その考え方や工夫が他のものにも展開可能であること、そして独創性があることを要件としている。今回の受賞作に用いられている工夫は、受賞者自身が考えたものではない。受賞者はUniLeaf ユニバーサル絵本ライブラリーの開催するワークショップで学んだ手法を用いて絵本を創作した。そのことを理解した上で、小学校4年生が、学んだことを確実に自分のものとしていることを評価したい、真似ることは研究の第一歩である、という理由で受賞を決定した。ストーリーや絵がオリジナルであることも評価された。

宇城市立中央図書館からは7年連続で応募があった。この図書館では毎年夏休みに、ボランティアの指導のもとで子ども向け「布絵本講座」を開催し、その作品を応募、優秀賞などを受賞してきた。昨年4月の熊本地震で、図書館は使用できなくなったが、別の会場を借りて講座は開催された。子どもたちはもちろんだが、指導しておられるボランティアや図書館のスタッフなどすべての関係者への感謝をこめて、特別賞を贈った。また、外部からみたUD絵本コンクールについて話をうかがいたいと考え、宇中央図書館長を講師にお招きし、表彰式後に座談会を開催した。

コンクールを支えている学生たちについてもふれておきたい。今年度のポスターと募集要項は西尾かなで（デザイン学科2年）のデザインである。彼女は、昨年度のコンクール入賞作品パンフレットもデザインしている。今年度の入賞作品パンフレットは村松咲歩（文化政策学科2年）が中心となり、表紙の絵は狩野里穂（デザイン学科2年）が、写真撮影は柴田頼人（国際文化学科2年）や田島麗称（文化政策学科2年）が担当した。この他に松本敏洸（文化政策学科3年）、清菜々子（文化政策学科2年）、野村祐衣（デザイン学科1年）など、学年、学科を越えた学生の協力でコンクールが運営されている。今後、さらに学生の創意工夫によってコンクールが発展していくことを期待している。

最後になったが、コンクールを7年間継続することができたのは、学内外の多くの方が尽力してくださったおかげである。ご尽力いただいたすべての方に、この場を借りて感謝を申し上げたい。

ユニバーサルデザイン絵本コンクール2016　受賞作品一覧

大賞		はっぱ　もり　やま	足立　寛奈
ユニバーサルデザイン研究賞		ヂェントル姫と女王様	四方あかり
子ども部門	優秀賞	がっきのUDえほん	山中　大暉
		おはなしをつくるえほん	鈴木　　泉
	佳　作	海ガメの大ぼうけん	安藤　佑真
		かちょうえんへいく	葛西　逸斗
		のぞきみ絵本	藤木　桜和
高校生部門	佳　作	なかみる	石川　綾音
一般部門	佳　作	くいしんぼう　ちゃちゃ　とまっくらせかい	女子美術大学3年グループちゃちゃ
		メリー　クリスマス	中村　尚子
特別賞		楽しかった夏休み	宇城市立中央図書館
		ななつのとびらのひみつ	森下　まゆり

（UD絵本コンクール2016　　表彰式　2016.11.12）

活動報告　SUAC　Report

ボローニャのフラテルナル劇団によるコンメディア・デッラルテ公演 ～『ドン・ジョヴァンニ―よみがえる石像の宴』

高田　和文（理事・副学長）

昨年に引き続き、ボローニャのフラテルナル劇団によるイタリア伝統の仮面劇コンメディア・デッラルテの上演とワークショップが行われた。今回の演目はジョヴァンニ・バッティスタ・アンドレイーニ原作『ドン・ジョヴァンニ―よみがえる石像の宴』である。静岡文化芸術大学文化・芸術研究センターの主催で、2016年12月2日に本学講堂において行われ、一般市民に無料で公開された。また、翌日には本学の体育館においてコンメディア・デッラルテの演技ワークショップが行われ、本学学生の他、地域の劇団の俳優、近隣の高校の演劇部員などが参加した。

コンメディア・デッラルテは、16世紀末にイタリアで成立した仮面劇で、イタリアのみならずヨーロッパ各地で流行し、その後約200年にわたり人気を博した。その最大の特徴は、台本を使わず、おおまかな筋書きをもとに俳優が即興で演じるところで、主要な人物が仮面と独特の衣装を着けて登場、風刺の利いたギャグとアクロバティックな演技で客席を沸かせた。

今回演じられた『ドン・ジョヴァンニ―よみがえる石像の宴』は、17世紀に書かれた筋書をフラテルナル劇団が脚色したもので、演劇史的にも非常に興味深い作品である。ドン・ジョヴァンニ（スペイン語でドン・ファン、フランス語でドン・ジュアン）は、17世紀にスペインで生まれた伝説上の人物である。何人もの女性を誘惑し、放蕩の限りを尽くしたあげく、墓地で見つけた石像をからかい半分に食事に招く。すると、その石像が動き出し、かつて自分が殺した男の亡霊となって目の前に現れる。最後には罰せられて地獄に落とされるという物語である。この人物を扱った作品は数多くあるが、中でも有名なのは、モリエールの劇作品『ドン・ジュアン―または石像の宴』（1665）、そしてロレンツォ・ダ・ポンテの台本にモーツァルトが曲を付けたオペラ『ドン・ジョヴァンニ』（1788）だろう。

しかし、この人物が登場する最も古い作品は、スペインの劇作家ティルソ・デ・モリーナの『セビリアの色事師と石の招客』（1630）とされる。今回上演されたアンドレイーニの作品は1651年の作だから、モリエールの作品の15年ほど前に書かれたことになる。いわゆる「ドン・ファン伝説」が、スペインからイタリアに伝わり、さらにそれがフランスにもたらされた歴史的経緯がうかがえる。

アンドレイーニは有名なコンメディア・デッラルテの一座「ジェロージ座」の俳優でもあった。父はフランチェスコ・アンドレイーニ、母はイザベッラ・アンドレイーニで、いずれも演劇史に名を残す名優である。コンメディア・デッラルテの演劇は、親から子へと代々伝えられ、継承されるのが通例であったが、彼はそうした典型的な「役者の子」であった。

一方、初期のモリエールがコンメディア・デッラルテの喜劇的手法を熱心に学んだことはよく知られている。当時、パリに定住していたコンメディア・デッラルテの劇団は「イタリア人一座」（コメディ・イタリエンヌ）と呼ばれていた。イタリア語と身体表現を駆使した彼らの喜劇に対抗して、モリエールは言葉（つまりフランス語）を重視した喜劇の確立を目指した。そして、彼が結成した劇団がフランスを代表する「コメディ・フランセーズ」の母体となる。こう見てくると、モリエールの演劇自体がまさしく異文化交流の産物であったとも言える。アンドレイーニがしばしばパリで公演していたことは記録に残っているので、モリエールの『ドン・ジュアン』が、その影響を受けたことは間違いない。さらに、他にも「ドン・ファン伝説」を題材に上演したコンメディア・デッラルテの劇団があったことも分かっている。

モリエールの喜劇が近代演劇の幕開けを告げる優れた傑作であることは疑い得ないが、その背景にイタリア人の俳優たちによる演劇活動の蓄積があったことは、もっと評価されてもよいのではないだろうか。今回の上演は、そうした演劇史研究の新たな方向を示唆するうえでも貴重なものであった。

アンドレイーニの作品は、ドン・ジョヴァンニの物語に天上界における神々の争いを重ねるという構成になっている。怒りと復讐の神がドン・ジョヴァンニをそそのかして人間界に混乱を巻き起こそうとするが失敗し、神々の世界にも人間界にも秩序が回復する。ドン・ジョヴァンニが地獄に落とされる結末は他の作品と同様である。２つの物語を組み込んだために、本来の劇の登場人物に加えて神々や死後の世界の人間までが登場、その数は約20になる。それをわずか5人の俳優が仮面と衣裳を次々に取り換えながら早変わりで演じて見せた。また、いくつもの楽器を1人で演奏し、多彩な効果を生み出した音楽も見事だった。他にも、秩序や権威を否定して本能のままに行動するドン・ジョヴァンニの人物像、主人の勝手な行動に振り回される召使いたちの嘆き、貴族の女たちと貧しい漁師の女たちとの対比など、見どころがいくつもある舞台だった。

今回の催しでは、「地域連携実践演習」の授業の一環として学生スタッフが事前広報、当日の舞台設営補助、受付け業務等を行い、音響・照明研究サークルp@thcodeが音響・照明を担当した。また、イタリアへの留学経験をもつ学生がリハーサルやワークショップの通訳を務め、留学の学習成果を示した。

活動報告　SUAC　Report

「子どもの足跡」プロジェクト

武田　好（国際文化学科）

去る11月26日（土）、本学において「あしあと同窓会」が開催された。今から15年前に浜松市の佐鳴湖畔で足跡を採った子どもや関係者を招いての、「子どもの足跡」プロジェクト交流会である。日本人、ブラジル人の「大人」になった方や報道関係者など含めて総勢40名が参加し、再会を喜び合う盛大な会となった。

この「子どもの足跡《The Trace of Walking》」プロジェクトは、世界の子どもたちの足跡で多文化をつなぐ道をつくり街を彩ろうという、現代美術家ホセイン・ゴルバ氏が提唱するアート表現である。イランに生まれ、イタリアで20年間創作活動を続けたゴルバ氏は、イタリア・フィレンツェでこのプロジェクトを開催し、ボーボリ庭園においてアジアとイタリアの子どもたちの足跡を公開した実績を持つ。それがこの多文化共生都市浜松で、元本学教員伊藤裕夫先生の発案で、第１期生の学生と教員、そして地元住民の協力のもとに2002年に実施された。

粘土板を子どもたちが足で踏み、一人１枚ずつ、この子どもは左、次の子どもは右というふうに採取して、順に並べていく。すると一本の小径ができる。人それぞれに“違い”はあるけれど、その違いにこそ大きな価値と意味があることをメッセージとして発信する。それがこのアート表現のコンセプトである。

こうして当時、小学生だった日本人、ブラジル人の子どもたち約60人の足跡が採取された。ゴルバ氏の言葉どおりに「道づくりは、遊びの感覚と楽しむ精神で、平和の共存を子どもたちに示しながら」行われたのである。焼成されたテラコッタ約60枚は本学に保管中であった。十年以上の歳月が流れ、このテラコッタ版を設置しプロジェクトを総括しようという機運が高まった。

その結果、2016年度「学長特別研究」の事業として、同時に「地域連携実践演習」の「子どもの足跡SUAC設置プログラム」としての活動が始まった。高田和文先生のアイデアで本学屋上の「創造の丘」にテラコッタは設置されることになり、協力の呼びかけに対して両学部から計15名の学生が名乗りを上げた。参加条件は次のとおり。「イタリア文化活動・多文化共生、多文化社会における芸術文化、地域における文化政策に関心のある学生、アートプロジェクト、パネル製作に関心のある学生」。いわば総力戦である。

約1年間にわたる活動内容を紹介する。まず、当時の子ども探しと交流会実施・広報を担当する班、説明パネル・銘板のデザインを担当する班の２チームに分かれ、4月より毎週の定例ミーティングで討議と活動報告を重ねた。全体の統括は高田先生、ミーティング等諸連絡は武田、日系ブラジル人の情報については池上重弘先生、デザインに関する領域は佐井国夫先生がサポートし、企画と運営は学生に任された。5月に伊藤先生からアートプロジェクトのレクチャー、2002年の映像記録の説明会。さらにゴルバ氏との顔合わせ、テラコッタの運搬と現場の下見。コーディネーター中小路太志さんが実寸を測っての位置決め。

リーマンショック後に日系ブラジル人が多数帰国した事情もあって、子ども探しは捗らず、かなりな困難を伴った。それでも学生たちはさまざまなルートをたどって一人、また一人と、まさしく足とネットを使って連絡先を確かめていった。夏休みの大半はこの仕事に費やされた。日葡２か国語でチラシを作り、配り歩いた。一方、デザイン班は、説明パネルと銘板のデザイン考案に専念し、皆の意見を取り入れながら文言とデザインを確定していった。

8月にテラコッタの仮置き。静岡新聞、中日新聞に本プロジェクトの記事が掲載された。8月末に業者による設置作業が完了。こうして2015年8月、本学屋上の「創造の丘」に多文化共生都市浜松にふさわしい「アートの小径」が完成した。本学エレベーター屋上階「創造の丘」乗降口前の説明パネル、芝生面に埋め込まれた銘板は、ともに彼らの手によるデザインである。

11月「あしあと同窓会」開催。2017年1月プロジェクト関係者の反省会。2月報告書の原稿集めとページレイアウト決定。3月報告書完成。各学生が自分の役割を買って出て活躍してくれることがなによりもうれしかった。そして、世界へ発信する「アートの小径」が出来上がる過程と、学生の成長の場面に立ち会えた運をありがたく思った。

「あしあと同窓会」での一コマ。ブラジルに帰国した「子ども」はビデオメッセージを送ってくれた。日本人の「子ども」は自らの将来を語り、自分のテラコッタを見つけて足を重ねていた。ブラジル人の「子ども」は連れてきた自分の幼い子どもにテラコッタを見せていた。

「まさに『子どもの足跡』の子どもだね」の言葉に一同破顔、笑い声が浜松の風とともに芝生の上を駆け抜けた瞬間を忘れられない。

最後にこの場をお借りして、本プロジェクトの総括がなされるまでに、多岐にわたってご協力くださった関係機関、本学事務局の方々、地域住民の皆様に感謝申し上げる次第である。

本学の「創造の丘」に置かれた作品《The Trace of Walking》が多文化共生の象徴として愛され、今後も市民の交流の場となることを願ってやまない。

テラコッタの運搬作業（2017年8月）

活動報告　SUAC　Report

ホスピタルアートプロジェクト

高島知佐子（芸術文化学科）

2015年度から本学で学生主体のホスピタルアートプロジェクトが進んでいる。本プロジェクトには、文化政策学部の学生がコーディネーター、デザイン学部の学生が制作者という形で関わっており、本学の教育・研究の特徴を生かした活動となっている。ホスピタルアートとは、医療や福祉の領域で行われる芸術活動を指し、欧米ではarts in healthcareなどの表現が使われることも多い。日本での活動事例も増えつつあるが、その手法や研究はまだ発展途上で比較的新しい領域である。

医療等での芸術活動というとセラピーを思い浮かべる人も多いだろう。セラピーは音楽療法などに代表されるように治療の一環として扱われることが多い。一方、ホスピタルアートは治療ではない。その目的は病院や活動に携わる人々によってさまざまである。無機質な病院の空間を変えたいという目的もあれば、アーティストと一緒に何かをすることで、院内に楽しみや創造性を生みたいというようなものもある。後者の場合、その対象は患者や入所者といった人々だけではなく、そこで働く職員も含まれる。中には地域住民を巻き込んだ活動もある。こういったホスピタルアート活動は、３つに大別できる。

一つ目は専門家（アーティストなど）が考え制作した作品等を施設に提供する活動である。この場合、見た目の雰囲気や印象を変えることが目的となる。二つ目は専門家が患者や入所者、職員とのコミュニケーションを通して作品を作るタイプの活動である。この種の活動では、患者や入所者、職員の考えや思いの共有化が重要となり、作品そのものの完成度よりも、完成までのプロセスを重視することとなる。三つ目は、場所としての施設を開放し、作品を設置するなどの活動である。小学校児童の描いた作品の展示などがこれに該当し、この活動の場合は地域貢献の要素が強い。

2015年度から浜松労災病院（浜松市東区）と本学の連携で始まったホスピタルアートプロジェクトは、上述の二つ目を目指した活動である。学生が病院職員との話し合い等の中から病院の現状を考え活動を企画する。2015年度はデザイン学部の学生を対象に制作者を募集し、病院の中庭を明るくする作品制作と、図書スペースの利用促進のための家具制作に取り組んだ。デザイン学部の学生8名（1～3年生・当時）と文化政策学部の学生6名（2～3年生・当時）が参加した。2016年度は2つのプロジェクトを企画し、両学部計11名の学生が関わっている。2016年度上半期は、病院での活動に賛同してくれる専門家を浜松市内で探し、本学デザイン学部の卒業生（建築ユニット+tic）が制作者として参画し、患者と職員が参加する形での作品制作を行った。下半期は、院内の図書スペースをより過ごしやすい空間にするためにデザイン学部の学生が制作者となり、現在（2017年2月）完成間近を迎えている。また、2016年度は静岡県立こども病院（静岡市葵区）とも連携し、駿府博物館（公益財団法人静岡新聞・静岡放送文化福祉事業団、静岡市葵区）で2016年7～8月に行われたファシリティドッグ写真展[1]に因み、入院患者を対象にフォトフレーム制作のワークショップを行った。デザイン学部の学生がフォトフレームのデザインを担当し、ワークショップで制作されたフォトフレームは駿府博物館で展示された。この一部は2017年2月から鴨江アートセンター（浜松市中区）で開催される「Care展」でも紹介されている。

このように少しずつ広がり積み重ねている活動ではあるが、文化施設ではない病院での活動は決して容易ではない。病院と学生、制作者間で、作品やそのプロセスへのイメージが一致せず意見が異なることもある。また、病院は規制も多く、さまざまな配慮を要する。なかなか前に進まず、学生は活動の難しさを噛み締めている。課題が山積する日々ではあるが、患者が笑顔を浮かべる様子や活動に寄せられる期待の声は、他では得られないこの活動の醍醐味と言えるだろう。病院では学生が普段接することのない人や状況に出会う。人々の多様性とアートやデザインの社会的価値を肌で強く感じることのできる場である。試行錯誤のプロレスを楽しみながら、病院と学生が互いに提案し合い活動を進めつつ、本学の学生以外にもこの活動に関心を持ち、取り組む人が増えていくようになればと願う。

1　ファシリティドッグは、ストレスを抱えた人々に安らぎ等を与えるよう専門的なトレーニングをつんだ犬のことを指す。ファシリティドッグの主な仕事は、知らない人に自分の体を触ってもらい、それを楽しんでもらうこと。特に子どもは動物が好きなため、犬とのスキンシップが子どものストレスを軽減することが明らかになっている（NPO法人シャシン！オン・キッズHPより）。ファシリティドッグを導入する病院は全国で二つあり、静岡県立こども病院はその一つである。駿府博物館ではこれら二つの病院で活躍するファシリティドッグの写真展を病院との連携のもと開催した。

活動報告　SUAC　Report

文化政策学科 舩戸ゼミを中心とした「浜松・中山間地域づくり学生インターン」の取り組みと成果

舩戸修一（文化政策学科）

浜松市の委託事業として今年度も文化政策学科 舩戸ゼミ生を中心に「浜松・中山間地域づくり学生インターン」を実施した。具体的には、私と学生３名で、天竜区春野町に9月6日から19日まで泊まり込み、現地で聞き取り調査を実施しながら、都市農村交流実施や集落維持の可能性を探った。今回のインターン活動は、春野町の杉第二自治会の「高杉集落」に絞り、聞き取り調査を実施し、9月18日には高杉集落の集会所において地域住民の方々の前で、その結果とそれを活かした地域づくりの方向性を発表した（なお高杉集落以外の杉第二自治会の「杉峰集落」と「久原集落」についてはアンケート調査を実施した）。

高杉集落は春野町の北東部に位置する（図１）。標高400～500メートルに位置し、周辺の斜面には茶畑が拡がる中山間地域である。現在、13世帯、45人が居住しており、そのうち12世帯への聞き取り調査を行った。

浜松市は、合併によって都市部と農山村が一体化した地域になったにもかかわらず、市内の都市部のほとんどの小学生は、北区引佐町の「かわな野外活動センター」「観音山少年自然の家」など公共施設を利用した自然体験学習を行っているため、現地に住む人たちと直接かかわる都市農村交流は進んでいない。そこで、聞き取り調査では、小学生を対象とした「農業・農村体験学習」（以下、体験学習とする）をここ高杉集落で実施可能かどうかを調べたところ、自宅に宿泊させることが可能と回答したのは、12世帯中8世帯であった。さらに宿泊が無理でも日帰りならば可能と回答したのは10世帯になる。体験学習の受け入れ実施については難色を示す、浜松の中山間地域の集落が多いなか、高杉集落では約９割の世帯が体験学習の受け入れに前向きな回答が見られた。

さらに、今回の調査では、体験学習の受け入れに対する意識や考えだけでなく、現在、集落から転出した子ども――「他出子」という――や孫の人数や居住先、そして実家に通う頻度についても聞き取りをした。以下では、この他出子についての調査結果を説明する。

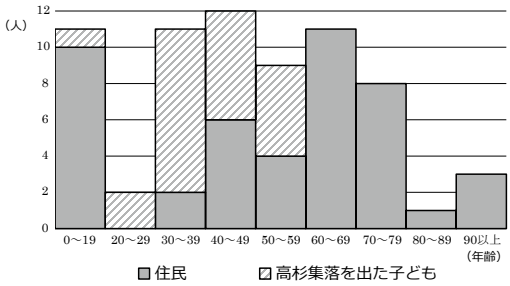
まず、高杉集落の他出子数であるが、24人いることが分かった。それを現在、高杉集落に居住している45人と合計し、年齢別に人口構成を見ると図2のようになる。現在、高杉集落には居住していない20代が他出子にいる。

次に、他出子の居住先をまとめたのが図3である。これから分かるように、その約7割は浜松市内に居住しており、約8割は車で約2時間以内の近距離に居住している。

さらに、他出子が実家に通う頻度をまとめたのが図4である。これから分かるように、その約9割は年1回以上実家に通い、全く実家に通わない他出子はほとんどいない。そして約5割は月に1回実家に通っている。

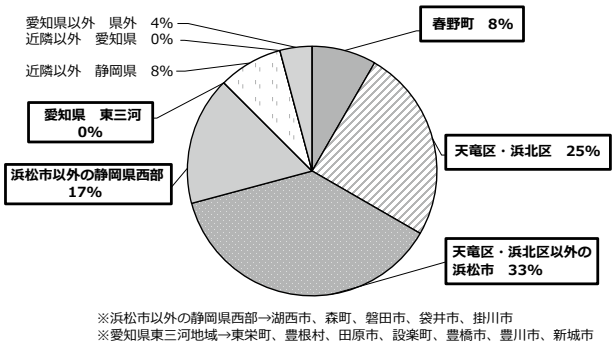
以上のように、他出子が集落の近くに居住し、その半分が頻繁に通い、実家に対して何らかの支援（農作業の手伝いや買い物支援など）を行っているならば、高杉集落の維持可能性は高いと言える。昨今、65歳以上が占める割合が半分以上になった集落を「限界集落」と呼び、その消滅可能性を煽るような論調が見られる。しかし、集落に通う他出子がいる限り、そう簡単に集落は消滅しない。「人口減少→集落消滅」という安易な論調に与しないためにも、集落の域を越えた「家族関係」の存在や「地縁・血縁による人的ネットワーク」――「ソーシャル・キャピタル（社会関係資本）」と言う――の蓄積という視点から中山間地域における集落の維持可能性を考えなければならない。

図1　高杉集落の位置



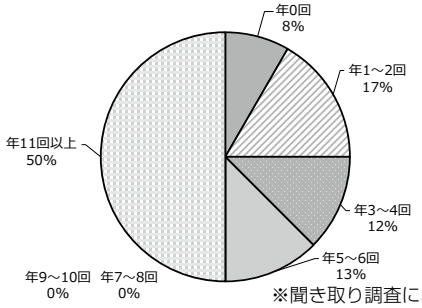
※聞き取り調査により作成

図2　他出子を含めた高杉集落の年齢別人口構成



※聞き取り調査により作成

図3　高杉集落の他出子の居住場所



※聞き取り調査により作成

図4　高杉集落の他出子が実家に通う頻度

活動報告　SUAC　Report

エスニックシティ・パリ
－ 公開講座報告「国際文化都市としてのパリ」として －

石川清子（国際文化学科）

2016年秋にSUAC公開講座「国際文化都市としてのパリ」のタイトルのもと、本学教員四名が都市パリの文化的国際性、卓越性について講じる機会をもった。筆者もそのうちの一回を担当し、立入正之先生はパリと外国人芸術家、松本茂章先生は14区にある国際大学都市、永井敦子先生はモードの都としてのパリの誕生についてそれぞれの回を担当した。

しかし、なぜこの時期に国際文化都市パリというテーマなのか。2015年、パリは二度の大きなテロ襲撃の現場となった。「表現の自由」が標的となった1月のシャルリ・エブド社襲撃事件の余波がおさまりかけた11月、日常生活を普通に楽しむ人々が多数犠牲になる無差別テロが起きた。パリは怖い ― 本来だったら4年生が卒業前の春休みにこぞって出かけるフランスやヨーロッパ方面への旅行が激減した。世界中から人を集める観光都市であり文化都市でもあるパリ。自他ともに公認するそのイメージの来歴をあらためて問い直してみようというのが、本公開講座のねらいであった。

自分が担当した第四回「エスニックシティ・パリ」の前の三回の講座は、いわゆるハイカルチャーを誇るパリと言えるだろう。絵画や美術、教育・研究と学術交流、モードと宮廷 ― これら文化的営為の中心として機能するパリのなかに、外国人や留学生の存在が大きく関わっている点を見逃してはならない。現在のフランスは、イスラーム過激派が関与した相次ぐテロ襲撃の波のなかでイスラーム嫌悪の傾向がたかまり、ムスリム系住民に誤った眼差しが注がれるようになった。昨夏、世界のメディアを騒がせた南仏海岸でのイスラーム式水着、ブルキニ禁止もその一例だろう。ここから、フランスは非寛容な国と導いてしまいそうだが、それは早急で、私たちが曖昧な概念のまま謳いあげ実践しようとしている「共生」を長い年月をかけて実現してきた国である。なかでもパリは外国人を受入れ、彼らをそこに根づかせてパリッ子にしていく、人種的・文化的共存や衝突の問題を考える際に大先輩となる都市である。現パリ市長アンヌ・イダルゴ氏もスペインにルーツをもつ移民の出自で、スペイン国籍も再取得している。パリが人種と民族の坩堝であることは、旅行者である我々でも、空港に降りて、地下鉄に乗って、スーパーで買物をするだけで即実感できるだろう。

アラビア語の落書き、漢字の看板、スパイスの香るマルシェ、ダビデの星を刻むシナゴーグ、ヒンズー教のお祭り ― 担当回では、観光名所からほんの一歩踏み込んだ街路で日々営まれているパリらしからぬ、しかし普段のパリを外国ルーツや民族という括りで明らかな地区を構成している市内の数カ所を紹介しながら、歴史と街の特徴、そして名物料理を見ていった。何がその地区のお奨め料理か、どんなレストランが人気なのか。観光客目線と言えばそれまでだが、食べることは我々の日々の営みの基本の基本である。

講座では、早くから移民街をなしていた下町のベルヴィルを始点に、4区マレ地区付近のユダヤ人街、5区と18区の北アフリカ出身アラブ人・ベルベル人街、13区の都市再開発地区にできあがった中華街、10区東駅付近パサージュ・ブラディ近辺に集まるインド系南アジア人街を散策していった。旧植民地や外国からの移民が多く居住する地域というと、バンリューと呼ばれる大都市郊外が思い浮かぶが、パリ20区のなかにも実にさまざまな外国出自の人々が暮らし、エキゾチックとも言える自国文化をそれぞれに移植し根づかせている。取りあげた地区の多くが庶民的といわれるパリ市東側（対して16区などの西側は高級住宅地）、かつ観光地から外れる二桁の数の区であることにも留意したい。たとえば、18世紀からのオリエンタリズム研究と切り離せない学術的アラブ地区（モスクやアラビア語書店、アラブ世界研究所など）が5区の文教地区にあるのに対し、18区のアラブ街はフランスが急速に近代化した19世紀後半に新たにパリ市に吸収合併された外郭地域で、ゾラ『居酒屋』の舞台となった労働者街グットドール地区がそうだと言えば、小説の醸し出す陰惨な雰囲気が伝わるだろうか。当時安価な家賃のこの一帯に外国人、移民労働者が集中して居住を始めた。今でも地下鉄バルベス＝ロシュシュアール駅周辺は、超安売りスーパー、タチをランドマークにして褐色や黒い肌の人で賑わうが、それでも近年の再開発後、かつての強烈なアラブ色が整理されてしまった感がある。

各地区紹介の最後は食べもので結んだ。ベルヴィルではチュニジア菓子とパクチーたっぷりのベトナムサンドイッチ、バインミー。ユダヤ人街からはひよこ豆の揚げ物ファラフェル。アラブ人街では今やフランスの国民食クスクスとミントティー。13区中華街からは行列の絶えない有名店Pho14のフォー。インド人街からはかつてのフランス領だったポンディシェリ由来のレストランPooja のカレーセット。これら異国の味わいも、多くがパリの普段食として定着している。異種の要素を引き寄せ、ごく自然に取り込んでいくパリ。もちろんそこには衝突もあるが、ダイナミックに他者を受入れ同化していくその力は、ハイカルチャーだけが売り物ではない、真に成熟した都市がもつ魅力でもあろう。

開催報告

文化芸術セミナーを開催

○「美術と音楽の西洋史　後編」

講師：立入正之（芸術文化学科・美術）、上山典子（芸術文化学科・音楽）

昨年開催された前編（「ルネサンス」「バロック」「新古典主義・古典派」）に引き続く後編が下記の通り開催された。本学教員の立入正之（美術）、上山典子（音楽）による講義に引き続き、各様式のピアノ作品が演奏された。

第1回「ロマン主義・ロマン派」ピアノ：石井園子　2016年10月26日
第2回「印象派・印象主義」　ピアノ：原田麻里　2016年11月　9日
第3回「現代美術・現代音楽」　ピアノ：大井浩明　2016年11月16日

（会場：静岡文化芸術大学講堂）

○「浜松　楽器の事典　トランペット編」

演奏：菊本和昭（トランペット）　新居由佳梨（ピアノ）

2014年度に「ピアノ編」で始まった「楽器の事典」シリーズ。2016年度は「トランペット編」が開催された。トランペットのトップメーカー、地元のヤマハ株式会社から開発技術者を講師として招聘、トランペットに関わる様々な講義（実演付き）の後、NHK交響楽団首席トランペット奏者、菊本和昭氏による軽妙なトークを交えた素晴らしい演奏が続き、金管楽器の花形、トランペットに関わる様々な知識とその魅力を伝えるセミナーとなった。

第1章「トランペットとは？」　講師：松隈義彦（ヤマハ株式会社）　2016年11月24日
第2章「トランペットの現在と未来」講師：福田徳久（ヤマハ株式会社）　2016年12月　8日
（会場：静岡文化芸術大学講堂）

編集後記

池上先生の巻頭寄稿にもある通り、昨年9月、根本敏行先生が急逝されました。秋のお彼岸の時季、前号Vol.24の編集作業が佳境の頃。初めてお会いしたのは、先生が本学に赴任された2004年4月、爾来12年半、様々な話題に関わる知的で刺激的なトークを通じて、実に多くの教えを頂きました。私と同じ感慨は本学の多くの人が抱くところでしょう。さらに私自身は先生との共同研究の機会を得、公開セミナーでは講堂のステージに並んで登壇させて頂いたことも･･･。副学長として、また「創造都市・浜松」の秀逸なブレーンとして、その御姿は余りにも鮮やかで、「この問題、根本先生ならば何と言われるか」と自問する日々は今も続いています。先生から以前頂いた「研究者、日日是研究」の言葉を明日のSUAC&浜松・静岡を創造する活動に必ず繋げる、“根本ロス”をまだまだ引き摺る年度末の決意です。（St.）

Art & Culture
文化芸術
文化・芸術研究センターニュースレター
Vol.25
March 2017

発行人：池上重弘　編集人：冨田晋司
発　行：静岡文化芸術大学 文化・芸術研究センター
（事務局　静岡文化芸術大学　地域連携室）

VEGETABLE OIL INK